

R

KANSAI
UNIVERSITY
NEWSLETTER

Man is a Thinking Reed.

eed

No. **44**

February, 2016

関西大学ニュースレター

発行日：2016年(平成28年)2月25日
発行：関西大学 総合企画室広報課
大阪府吹田市山手町3-3-35
〒564-8680 TEL.06-6368-1121
<http://www.kansai-u.ac.jp/>

この伝統を、超える未来を。



■対談：タカラジエンヌから、げんせつ小町への転身
**未知なるステージでも
輝くために**
小西 恵子 山口建設株式会社 / 楠見 晴重 学長

KEIKO

KONISHI

■リーダーズ・ナウ ー5

在学生ー 経済学部 4年次生 石田 光宏 さん
卒業生ー A*STYLE 代表 カラーコンサルタント 林 由恵 さん

■研究最前線

初期ネーデルラント絵画の諸問題の研究
イコノロジーと科学的調査で絵画の背景探る ー7
文学部 ー 蛭川 順子教授
ユーザ中心デザインの研究
ユーザの立場から使いやすい情報デザインを探求 ー9
総合情報学部 ー 堀 雅洋 教授

■トピックス [学内情報] ー11

グランプリファイナル、全日本フィギュアスケート選手権大会
宮原知子さん、本田真凜さんが大活躍
内閣総理大臣杯第43回全日本空手道選手権大会
清水希容さんが金メダルを獲得！ほか

■社会貢献・連携事業 / 地域連携 ー13

日本初開催！「第5回世界工学会議(WVECC2015)」に出展
科学技術の祭典で、関西大学の「知」を世界へ発信
イノベーション対話プログラム「AjiCon2015」開催
こんなアイデアどうですか？
～文系学生と理工系技術のコラボが生み出す新アイデア～ ほか

■関大ニュース ー15

体育会ラグビー部が47年ぶりの全国大学選手権大会出場で初勝利！ほか



●タカラジェンヌから“けんせつ小町”への転身

未知なるステージでも 輝くために

土木事業は快適で安全な未来を築く社会貢献

小西 恵子 ●山口建設株式会社
楠見 晴重 ●学長

元タカラジェンヌの小西恵子さんは、阪神・淡路大震災からの復興に尽くす現場作業員の姿を目にし、女性だけの華やかなステージから、いまだ男性社会のイメージが強い建設・土木の世界に転じた。今回は地盤工学の専門家として、土木の研究と教育の現場に身を置いてきた楠見晴重学長が、“ドボジョ”として生きる道を切り開いてきた小西さんと、変化する時代の中で求められる女性の活用、教育、社会貢献等について話し合った。

1995年、阪神・淡路大震災で被災した「JR六甲道駅」周辺
(写真提供：神戸市)



◆平凡な日々を変えたくて、タカラジェンヌに

楠見 小西さんは宝塚歌劇団に在籍されて、今は建設会社にお勤めというユニークな経歴をお持ちですが、そもそもタカラヅカを目指した理由を教えてくださいませんか？

小西 私が生まれ育った和歌山県の橋本市は田舎で、当時は小中高と地元の学校に行くのが当たり前。保育園から高校まで、ずっと同級生が変わらない。そんな中で、平凡な日々を過ごしながら自分の将来が見えた気がしました。「このままで、いいのかな？」という不安と疑問が中学生の私の中で強く生まれたのです。環境を変えるため高校受験を機に地元から出てみようと思いました。「どうせ環境を変えるなら、いっそ女子校がいいな」と思ったって母に相談したら、女子＝タカラヅカというイメージが母の脳裏をよぎったようで、「タカラヅカだったら、素敵でいいんじゃない？」と言われたのです。「じゃあ、タカラヅカに決めた」と軽い気持ちで、宝塚音楽学校の願書を取り寄せました。願書で初めて受験科目に「歌唱」と「舞踊」があることを知り、未経験者の私は崖っぷちに立たされた気分でしたが、地元から抜け出したい気持ちも原動力になり、どうせ目指すならハードルが高い方が面白いので、ダメもとでやってみようと思いました。

宝塚音楽学校の受験資格は中学卒業からだったので、中学卒業時、一度試しに受験しましたが、結果はもちろん不合格でした。それから地元の高校に通いながら、授業が終わったら電車に飛び乗り、宝塚の受験スクールに通いました。そこは全国からタカラヅカを目指す人達が集まる場所で、平凡に育った私にとって全く違う世界でした。共に同じ目標に向かって切磋琢磨することで、今まで自分になかった向上心や競争心が培われたと思います。多感な時期にそれを経験できたことは私にとって良い財産です。そして高校1年を終業した時に、奇跡的に合格することができました。倍率は20倍以上あったと聞いています。

楠見 歌劇団に入られてから、記憶に残る舞台はありますか？

小西 出演させてもらった舞台すべてが印象的です。タカラヅカ



タカラヅカ娘役時代の小西さん

は何でも成績順です。下級生のうちは成績が良くないと良い役ももらえない。私は出来が悪い方で、特にバレエやダンスは、幼い頃から特訓している人にはどうしても追いつけない。ダンスより歌ばかり練習していました。その結果、声楽の成績では一番を取れることもあり、東京公演で、下級生ながら純名里沙さんの歌の代役として本公演で歌わせていただいたこともありました。

◆震災復興の現場を目の当たりに。建設業界へ

楠見 華やかなタカラジェンヌが、どうして土木の世界に？

小西 劇団員として宝塚大劇場の近くで一人暮らしをしていた時に、阪神・淡路大震災が起こりました。震災があったその日は、劇団員みんな、訳も分からずパニック状態。新築の大劇場も、スプリンクラーが壊れて水が吹き出したり、もう本当にひどい状態でした。東京公演を控え稽古中でしたが事態収拾まで一旦待機になり、私も何も分からず心細いばかりでしたので、すみれ寮に身を寄せていました。

当時、テレビの報道では、自衛隊や救急隊の活躍がクローズアップされていましたが、実家が建設業を営んでいたこともあって、被災者のため懸命に復旧作業を行う作業員の方や重機が、私の目に飛び込んできました。

タカラヅカは、人々に夢を与える意義のある素敵な仕事ですが、建設業は、直接的に人の生活の基盤につながる仕事だと強く感じました。自分に何か出来ることはないか、人々の生活基盤を支える仕事に携わりたいと考え、土木の世界にチャレンジしてみようと思ったのです。

楠見 それで、和歌山に戻りご実家の仕事を手伝わられたわけですね。芸術の世界から土木の世界へと転じるのは、すごい決心だと思います。

小西 それだけ目にした震災の被害が酷かったということがあります。電車が脱線し、家が倒壊して悲惨な状況でした。普段見慣れている景色があっけなく変わり果て、同時に多くの人が悲惨な目に遭う。それを嘆くばかりではなく、迅速に復旧に取り組み人の役に立つ土木業界の姿勢は私にとって衝撃的でした。

楠見 確かに、小・中学生で震災を経験し、防災や減災に携わりたい、人の役に立ちたいと土木関係の学科を希望する学生は多かったですね。

◆資格の勉強を通じて、新しい世界になじむ

楠見 私は土木工学の研究と教育に長年関わってきました。今は少し変わってきましたが、土木は“無駄な公共事業”という見方をされていた時代もあって、どちらかというと悪いイメージが先行しています。小西さんのように、土木の世界に入って行こう、それも華やかなタカラヅカからの転身は、我々にとっては、非常にうれしいことです。しかし、いきなり土木の世界に入られて、戸惑うことはありませんでしたか？

小西 譜面を見ていたのが、図面が変わったわけですから、正直右も左も全く分かりませんでした。なんとか土木業界にとけ込めるよう近道を探さないといけないと考え、資格を一つずつ取得することにしました。資格のための勉強をするうちに、仕事が身近

■対談



大学の主な使命は、昔は教育と研究でした。今は、それに社会貢献が加わっています。地域の人達と一緒に地域の課題を解決することも大きな社会貢献です。

に感じられ、専門用語も分かるようになり、ようやく周りの人の会話について行けるようになりました。

楠見 具体的に、何の資格をこれまでに取られたのですか？

小西 土木といっても分野が多いので、何から取っていけば良いかわかりませんが、まずは1級土木施工管理技士から始め、その後必要な資格を年の一つずつ取得しています。今もまだまだ勉強中です。

楠見 1級土木施工管理技士は、大学で土木などの指定学科を卒業し、実務経験を3年以上積んで、受験資格を得るのが一般的ですね。

小西 15年実務を経験して受験資格を得てから受けました。

楠見 勉強は独学ですか？

小西 独学です。講座を受講しても講師の説明していることが理解できていないと結局はついていけないので、過去問題集を購入して、ひたすら理解できるまで自分なりに勉強しました。記憶力は良い方なので、公式など覚えなければいけないことは、とことん暗記しました。

楠見 相当の理解力がなければ、合格できません。知識がゼロの状態から10以上資格を取ることができる人は、そうそういないですね。今は現場にも出られているのですか？

小西 実務が多いですが、現場にも行きます。工程が進んで構造

物が出来上がってくるのを見ると、事務所でパソコンを叩いているよりはるかに楽しいです。

◆土木の世界でも、活躍する女性は増えている

楠見 土木の世界は男性社会のイメージが強い。しかし最近では、現場で活躍されている女性が徐々に増えています。本学の卒業生も頑張っています。現場の環境は整ってきているのでしょうか？

小西 以前は資格試験会場でも、女性は私だけということがありました。まだまだ少ないと思いますが、最近現場で働く女性が増えてきていると肌で感じます。

2、3年前から、“ドボジョ”や“けんせつ小町”といった愛称で、土木の世界で働く女性が注目されるようになってきました。建設業界は担い手不足が深刻化しており、女性に限らず、男性も若い方も足りていない。いくら時代が進んでも、土木は人で成り立つ業界です。業界全体がもっと女性に興味を持ってほしいと願っています。

いまだ建設業界に対する泥臭いイメージが根強く残っていて、女性からすると、多くの職業の中で最初から土木は選択肢にあがってこないのだと思います。土木への古いイメージを払拭していくことが課題と考えています。実際に現場を見てもらえば、スコップメインで泥を掻き集めるようなイメージとは違うことがよく分かると思います。

学生はいかがですか？土木を学ぶ女子学生は増えていますか？

楠見 本学には3つの理工系学部があります。大学全体では1年次生で女子学生の占める割合が2015年度は44%と、非常に高くなってきましたが、理工系学部では、やはりまだ女子が少ない。私たちとしてはもっと“リケジョ”が増えてほしい。

理工系学部の一つ、環境都市工学部には防災・環境・交通問題など都市システムを計画・設計し、管理・運営する人材を育てる都市システム工学科があります。この学科の1学年の定員は130人程度。そのうち、女子は15人程度です。その中から、文系就職など違う業界に進む学生が2、3人程度で、女子もほとんど建設会社などに就職します。大手建設会社も女性技術者の採用に積極的になっているので、今後、女子の割合はもっと増えるだろうと思います。

私の専門は地盤工学で、同じ建設関係でも、都市工学や環境工学より女子に人気がない研究室ですが、2015年度は女子の割合の方が多くなりました。研究室でよく開催する現場見学会でも、一人で入り込んで行く女子学生がいますね。

小西 頼もしい女の子ですね。そういうお話を伺うとうれしくなります。

▼工事現場に立ち会う小西さん



土木の仕事は現場だけではなく書類作成や工程管理、ミーティングなど多岐にわたる

◆大学と建設業界。それぞれが担う社会貢献

楠見 大学の主な使命は、昔は教育と研究でした。今は、それに社会貢献が加わっています。地域の人達と一緒に地域の課題を解決することも大きな社会貢献です。その一つとして、本学は2016年1月に和歌山県および田辺市と、地域活性化に関する連携協定を結んだところで。

また、大学の社会貢献においては、大学が持つ知的財産を、いかに社会に対して還元するかが問われます。今年、創立130周年を迎える本学では、記念事業の一つとして「イノベーション創生センター」を設立します。これまでも本学では企業との共同研究などさまざまな産学連携を行ってきましたが、「イノベーション創生センター」では、さらに一歩進めて、キャンパスの中に企業等の研究部門を誘致し、大学の研究者や学生と一緒にイノベーションを創出していこうとしています。

建設関係の仕事は、事業を通じて社会貢献を意識する場面があると思いますが、いかがですか？

小西 水道やガスなどライフラインやインフラの整備は、地域の方の暮らしを支える社会貢献であることを実感します。さらに私は“防災＝土木”だと考えています。

道路や橋梁を造り、整備することは普段の生活の利便性を高めますが、それだけでなく、いざれ起こるかもしれない南海トラフのような巨大地震にも耐え得るインフラを造ることや補強することで、防災や減災の役に立つことができる。それが一番の社会貢献なのではと思っています。

◆答えのない学びの形。“考動力”を育む

楠見 その考え方は私も同感です。最後に、タカラヅカの受験に始まって、現在まで自分の道を挑戦的に切り開いてこられた小西さんから、若者にメッセージをお願いします。

小西 生意気なことを申し上げるようですが、タカラヅカに入った時に、私が合格することによって、残念ながら合格できずにごく悔しい思いをした人がたくさんいる。その人達の方も、頑張らないといけないという責任を感じました。関西大学へ合格された方も、自分が希望する会社に就職できた時も、選ばれた者の責任感を持つことは大切だと思います。

責任感を持って前に進むにつれ、より大きい壁にぶつかり、理不尽なことを経験するかもしれませんが、若い皆さんには臆することなく我慢強くぶつかってほしい。自分の殻を破ることにつながるはずです。

最近の若い方は、インターネット等の恵まれた環境で育っているからか、どうしてもすぐに答えを求めがちです。しかし、正解がある学問とは違い、社会には答えがないことがたくさんある。我慢強く、時間を掛けないと、自分の探す答えは見つからないということをまず分かってほしいと思います。

楠見 新入生を迎える時に私も、「高校までの勉強には答えがあり、正しい道を選べば必ず一つの正解にたどり着くと理解しているかもしれない。しかし、大学の学びには、実は答えがない。あるいは、答えがいくつもある場合がある。だから、学びの形を

責任感を持って前に進むにつれ、より大きい壁にぶつかり、理不尽なことを経験するかもしれませんが、若い皆さんには臆することなく我慢強くぶつかってほしい。



大きく変えてください」という話をします。

実際に1年次から、高校とは違うスタイルの少人数ゼミ形式の授業を増やしています。その中には「スタディスキルゼミ」といって、新入生を対象に、大学での学びに必要な、聞く・調べる・読解する・書く・発表する・議論するなどの基礎的スキルを学び、実践する授業もあります。

本学は、自らの頭で考え、自律的に行動する“考動力”に溢れた人材を育てることを目指しています。考動するとは、まさに答えのない問いに対して、自ら考え行動することです。正解が一つだけではないことを実社会の中で実感し、考動し続けてきた小西さんの言葉は若者に響くだろうと思います。

小西 恵子 (こにし けいこ)

1973年和歌山県生まれ。90年宝塚音楽学校入学。92年宝塚歌劇団入団。78期生。雪組配属。新人公演「風と共に去りぬ」でベル・ワットリング役を演じるなど、娘役として活躍。96年退団。同年山口建設株式会社(和歌山県橋本市)入社。

楠見 晴重 (くすみ はるしげ)

1953年大阪府生まれ。78年関西大学工学部土木工学科卒業。81年同大学大学院工学研究科博士課程後期課程中途退学。82年関西大学工学部助手。90～91年英国Imperial College留学。関西大学専任講師、助教授を経て、2002年教授。07年環境都市工学部教授となり、同年4月から学部長に。09年関西大学学長に就任。文部科学省大学設置・学校法人審議会特別委員。一般社団法人日本私立大学連盟副会長、公益財団法人大学基準協会理事、公益財団法人土木学会フェロー会員。主な共編著書に「地圏環境情報学 地下を診る最先端技術」「アジア古物語 京都一千年の水脈」など。

LEADERS NOW!

■リーダーズ・ナウ [在学生・卒業生インタビュー]



社会人野球で日本一に

直球に磨きをかけ、総合力で勝負

●経済学部 4年次生
石田 光宏 さん

今春から社会人野球チームの名門、東京ガス硬式野球部への入部が内定した石田光宏さん。大学では4年間を通じてエースとして活躍し、平成26年度関西学生野球連盟秋季リーグではチームを19年ぶりの優勝へと導いて、42年ぶりの明治神宮野球大会出場を成し遂げた。続く平成27年度関西学生野球連盟秋季リーグでは、史上10人目、25年ぶりの快挙となるリーグ戦通算30勝を達成。その躍進の裏には、気持ちの強さとチームメートの支えがあった。



大学通算30勝達成の大横断幕▶

「一番の持ち味は、気持ちの強さ」という石田さん。スライダーやツーシームなどの多彩な変化球を操り、特にランナーを出してからの粘り強いピッチングには定評がある。甲子園の土こそ踏んでいないが、大学では1年次生からマウンドに立ち続け、リーグ戦通算30勝を達成するなど、数々の偉業を成し遂げた。しかし、「まだまだ波のある選手だと思います。30勝したけれど23敗している。周りには分からなくても、自分では投球やコントロールのブレを感じていました」と、自身を冷静に分析。追い求めていたストレートの感覚がつかめたのは、最近だという。

石田さんを飛躍へと導いたのは、2年次生の冬に就任した早瀬万豊監督だった。社会人野球で投手・コーチ・監督の経験を持つ同氏によるフォームや投球技術、意識の仕方等の感覚的な指導は、とても分かりやすかったという。「それまで正しいと思っていた投げ終わりのフォームがベストではないことに気がきました。そこを修正することができ、制球や打たれにくいストレートを磨くために目指すべきポイントもクリアになった。それらを追うことで感覚がつかめ、投球が安定しました」。

一番心に残っている試合は、自身初の全国大会であり、42年ぶりの出場となった第45回明治神宮野球大会。創価大学に敗れたものの、タイブレークまで及ぶ、緊張感のある好ゲームだった。さぞプレッシャーを感じただろうと思いきや、「プレッシャーは力に変えるものであって、マイナスに働かせるものではない。だから練習の時から、あえて自分にプレッシャーをかけています」とほほ笑む。「神宮大会では納得のいく投球ができました。関東

の強豪相手にあのようなゲームができたのは、本当に大きかったです」。寺嶋寛大捕手(現千葉ロッテマリーンズ)や今秋のドラフト会議の目玉と言われる田

▲第45回明治神宮野球大会で力投する石田さん
(写真提供: 関大スポーツ編集部)

中正義投手と対戦したことで、プロに進める選手の力量を肌で感じ、さらに上の世界への“物差し”を得たという。

練習で、石田さんは多い時は日に350球もの投げ込みを行っていたと言います。「僕はわがままなので、自分のタイミングで練習に付き合ってもらうことも多く、チームメートにはたくさん負担をかけ、サポートしてもらいました」。30勝を達成した秋季リーグ戦では、試合終了とともに、そのチームメートによる「絶対的エース石田光宏 祝30勝 感動をありがとう」の大横断幕が掲げられた。「知らないうちに作ってくれていて、1年次生から登板していたので、調子に乗っていると思われた時期もあったと思う。でも、日々の行動や練習に対する姿勢から、いずれ理解してもらえるという思いでやってきました。応援してくれて、本当にありがたかったです」。

1月、石田さんは新天地である東京ガス硬式野球部での練習を開始した。ドラフト候補とされながらプロ志望届を出さなかった理由を尋ねると、「まだプロの投手に勝っている点がない。同じ舞台上で勝負できる武器を1つでも多く身につけ、2年後にはドラフト1位で声が掛かる選手になりたいです。けれど、今の最大の目標は東京ガスを日本一にすること。プロのステージは結果としてついてくるものだと思います」。石田さんの新たな挑戦から目が離せない。



石田 光宏—いしだ みつひろ

■1994年、滋賀県米原市生まれ。近江高等学校卒。体育会野球部所属。右投右打。10歳で野球を始め、高校では県大会優勝、近畿大会1回戦進出。大学1年次生からリーグ戦に登板し、エースとして活躍。3年次生で19年ぶりとなるリーグ優勝、最優秀投手賞を獲得し、42年ぶりの明治神宮野球大会出場に貢献。4年次生でリーグ通算30勝を達成。第59回関西スポーツ賞受賞。

色のチカラで 人と社会を元気に!

カラーのすべてを学べるスクールを創業

●A*STYLE 代表 カラーコンサルタント
林 由恵 さん —文学部 1996年卒業—

カラー総合スクール「A*STYLE(エーススタイル)」は、JR奈良駅にほど近いビルの2階にある。このスクールを独立開業した林由恵さんは、色を通して、受講生一人ひとりが自分らしい人生を生きることがサポートする。A*STYLEは、色のチカラで「自分や周りを元気にする人」を育てる学びの場だ。



カラーコンサルタント・林由恵さんが運営するカラー総合スクール「A*STYLE(エーススタイル)」では、色を使ってその人の魅力を最大限に引き出す知識やスキルをはじめ、色彩理論、色彩心理など、色のすべてを学ぶことができる。

林さんは色彩コーディネーター、ファッションカラーコーディネーター、色彩講師などの色に関する資格はもちろん、キャリア・コンサルティング技能士、速読インストラクターなどの資格も保有。A*STYLEで講義を行うだけでなく、大学・専門学校でも講師を務める他、就職支援、企業の人材育成、起業支援のコンサルタントとしても幅広く活躍中だ。

A*STYLEの受講生はほとんどが女性。年齢層も幅広く、目的もスキルアップや自分磨きなどさまざま。共通しているのは、色を取り入れて自分らしい人生を見つけ、自信を深めていくこと。

「色には人間の持つ可能性を引き出すチカラがあり、それぞれの色やその効果を知ること、さまざまなシーンで活用することができます。A*STYLEは“色のチカラで人と社会を元気に!”を企業理念とし、“元気”とは“自己肯定感”だと考えています。それは、ありのままの自分を受け入れ、自分を信じていることができる状態。皆が自分らしい人生を実現することをサポートしたいです」と、スクール運営にかける思いを説明する。



▲(左)色のすべてを楽しく学べる「A*STYLE」の講義(右)カラーセミナーの様子



林 由恵—はやし よしえ

■1973年奈良市生まれ。92年奈良育英西高等学校卒。96年関西大学文学部英文科卒。繊維専門商社勤務を経て、2004年 color studio A*STYLE を設立。A・F・T 級色彩コーディネーター、東京商工会議所認定一級ファッションカラーコーディネーター、色彩検定協会認定色彩講師、二級キャリア・コンサルティング技能士、脳開コンサルタント協会認定速読インストラクターなど、保有資格多数。

英語教員を志し、関西大学に入学。3年次に進路を考えた時、好きだったファッション・アパレル業界に進みたいと軌道修正し、繊維専門商社に就職。その後5年で退職した。「まだ知らない自分に会いたかった。新しい世界にチャレンジするならば20代のうちと考え、1年間、100万円を自分に投資することだけを決めて、会社を辞めた」と振り返る。色に出合ったのは、その人生の投資期間のことだった。受講したカラーセミナーで、色と心が深く関係していることを知り、興味を持ち始めた。それから2年間、専門学校で色彩について学び、A・F・T 色彩検定1級に合格した。2004年、A*STYLEはスタートしたものの、受講生はたったの3人。それが13年目に突入した今、これまでに学んだ受講生は2000人を超えた。「今後は、奈良から色の面白さや楽しさを発信し続け、私と同じように、人を元気にしたいと思う講師の育成に力を入れていきたい。そして、育成した講師と一緒に、地域に密着した教室を全国に開校することが夢ですね」とプランは膨らむ。

「わくわくする気持ちを大切に、素直に生きていきたい。それがたとえ困難な夢であっても、できるかできないかではなく、やりたいかやりたくないかで選びたい」と真っすぐな行動力で自分の道を切り開いてきた林さん。

大学時代を振り返って思い出すのは、赤の服をよく着ていた2年次の頃のこと。

「赤は行動・革新・チャレンジの色。当時の私には明確な目標がありませんでしたが、身体の中から“動きたい”という衝動がわいていたのだと、今は分かります。色はその時の自分自身を投影し表現することができるので、色を効果的に用いることで、キャリア教育やキャリア支援にも役立ちます。これからも、後輩たちに色の持つチカラと可能性を伝えていきたいです」。

■研究最前線

初期ネーデルラント絵画の諸問題の研究

イコノロジーと科学的調査で
絵画の背景探る

作品に関する確かな情報を集め、仮説立証

●文学部

蜷川 順子 教授

科学的調査を基礎に確かな事実を積み重ね、蜷川順子教授は名画の成立から現在に至る歴史を丹念にたどり、かかわった人物や文物を整理する。まるで名探偵のように新たな物語を読み取り、名画を一層意味深いものに変えていく。西洋美術史家として、特に初期ネーデルラント絵画を専門とする蜷川教授は、何世紀も前の古典作品にも、まだまだ新しい発見があり、新たな価値が生み出されることを証明している。



- 蜷川教授の主な編書・著書・訳書
- 『初期ネーデルラント美術にみる“個と宇宙”』(ありな書房 2011年 共著)
- 『油彩への衝動』(中央公論美術出版 2015年 編著)
- 『美術でたどる世界の歴史』(ナツメ社 2004年)
- 『シンボルの修辭学』(晶文社 2007年 共訳)



■油彩技法が確立された写実主義の時代

— ご専門は西洋美術史とお聞きしていますが、その中でも主な研究対象は？

15世紀から16世紀にかけて、ネーデルラント(現在のベルギー、オランダ、ルクセンブルクとフランス北部、ドイツ西部を含む、低地の国々)と呼ばれる地域で発展した「初期ネーデルラント絵画」を研究しています。主な画家には、ヤン・ファン・エイク、ロヒール・ファン・デル・ウェイデン、ハンス・メムリンク、ヒエロニムス・ボスなどがいます。中でも、ファン・エイクは塗り重ねた油彩の絵具層に透明に近いグレイズを施すなど、画期的な絵画技法を発明し、現代まで続く油彩技法の基礎を確立した人物として重要です。

— 初期ネーデルラント絵画はどのような特徴がありますか？

中世のヨーロッパでは教会が絵を発注し、主に宗教画が制作されていましたが、当時のネーデルラントは経済と政治の中心地で、経済力をつけた市民が台頭し、画家に絵を発注するようになりました。それに伴い、これまでのキリスト教の図像とは違った、市民的な要素が絵の中に入ってきます。聖書の物語を描きながら、複雑な寓意やメッセージがたくさん描き込まれるようになります。

技法的には、ファン・エイクに始まる油彩への転換が進み、肌理、質感を精緻に描き出せるようになり、写実主義の表現が高度に発達しました。

このように初期ネーデルラント絵画の時代は、受容層や題材、技法など、さまざまな面で新しいものが出てきて、クロスオーバーな状況が生まれていました。その現実を画家がどのように見て、どう表現したかを探ることは非常に興味深い作業です。



■科学の目で見つめ直す、作品成立のプロセス

— 美術史の研究にも、いろいろな手法があると思います。先生はどのようなアプローチの仕方をされているのですか？

私も翻訳にかかわった『初期ネーデルラント絵画—その起源と性格』の著者である、アーウィン・パノフスキーが、本格的に理論化したイコノロジーという研究手法があります。イコノロジーは図像を解釈し、そこに含意される意味内容や歴史的、哲学的、文化的意味を探究するもので、私はこの手法に深い感銘を受けました。しかし、オランダやベルギーの大学で、科学的調査を中心にされている先生方に出会ってからは、イコノロジーとテクノロジーの手法を合わせるのが重要だと考えています。

— 絵画の科学的調査とは、どのようなことをするのですか？

科学的調査は、作品に関する情報を得るために、機器を用いて作品の物質的特性などを調べます。現在では肉眼観察を含めて、電子顕微鏡などを用いた光学的調査が主流で、斜光や、紫外線、赤外線、X線など可視光線以外の光線を用いて調査することもあります。

このような調査によって、例えば、下に絵があるとか、この顔は後年に描き加えられたという事実が明らかになると、作品の持つ意味が全く違ってきます。今、目にしている絵ができるまでに、どんな人がかかわったのか、最初に注文した人、顔を描き加えようとした人はどんな立場で何を考えたのかなど、歴史のダイナミズムをたどるのはワクワクします。現代の美術史研究では、科学的調査によって、制作時期や技法などに関する情報を得ることは、もはや欠かせません。

— 科学的調査は実物を直接見なければできないのでは？

通算でベルギーに1年半以上、オランダに足掛け4年いた間は、なるべく実物を見る機会をつくっていました。本当はもっと行き

◀キャプテン・クックの生家で

たいのですが、大学で学生と接するのも楽しいので、しばらくは日本で研究するつもりです。現地での科学的調査は報告書が出されるので、それを読んで推理しています。

初期ネーデルラント絵画のような古い作品の実物を入手するのは難しいですが、芸術学美術史専修ではもう少し新しい作品を標本模型として購入しています。例えば、オスマン帝国時代のトルコで制作された、フランス柄のゴブラン織の実物を見ながら、東西交流を探ったりします。また、収集した作品は、学生の企画による展示に利用する場合があります。

■ダフィットの名作に隠された秘密を明かす

— 500年以上も前の初期ネーデルラント絵画について、徹底的に研究された今でも、新しく分かることがありますか？

実は最近、科学的調査結果だけでなく古文書分析もおこなうことで、重要な発見をしたのです。16世紀の画家ヘラルト・ダフィットの代表作に、ベルギーのブルッヘ(ブリュージュ)市立美術館が所蔵する祭壇画『キリストの洗礼三連画』があります。祭壇画とは教会や家庭内の祭壇を飾る、宗教的テーマを描いたパネルです。ダフィットのこの祭壇画は、中央のパネルにキリストの洗礼の様子、両翼にこの絵の寄進者の家族が描かれています。

寄進した家族を両翼に描くのは、当時の祭壇画にはよく見られますが、左翼に描かれた一人息子が、右翼の母親の前に並ぶ娘たちとは異なり、父親の影に隠れるように描かれています。寄進者である父親は、神聖ローマ皇帝マクシミリアン1世の高官だったことが、古文書から分かっています。それだけの名士でありながら、息子は結婚もしないまま亡くなっています。現地の古文書を仔細に調べると、この息子は極めて病弱だったのではないかと推察され、それを証明する資料も探し、論文にまとめました。誰も指摘していなかったことだったので、ドイツの学術雑誌に掲載されました。

— 他にも、関心のある研究テーマはありますか？

「近代のキリスト教図像の変容」に興味があります。幼子イエスはもともと人間的な存在で、中世の西洋美術では必ずマリアに抱かれていました。初期ネーデルラントでもそうです。ところが、16世紀後半になるとイエスが単独で立つ絵が急が増えてきます。その姿は、釈迦誕生のエピソードを思わせる場所もあって、アジアとの接触による影響も考えられます。

単独のイエス像が絵の題材となるのに並行して、単独のマリア像も描かれるようになります。日本では、江戸末期に来日した外



国人のためにキリスト教が再上陸します。しばらくして、パリ外国宣教会がマリア像をいくつか贈っていますが、イエスを抱いていない単独の像もありました。単独のマリア像は何を意味するのか？なぜ、日本にそれを贈ったのか？これには深い背景があって、謎解きをした論文も数本書きました。これらをまとめて、本にしたいと思っています。

— 美術史研究は難しくありませんか？誰でも楽しめますか？

誰でも楽しめますよ。絵の見方には決まりがありませんから、それぞれの楽しみ方で見ればよいと思います。その上で、モデルが存在したのかなど、絵の背景の情報を知りたくなったら、ぜひもう一步深く踏み込んでください。きっと、歴史や地理、宗教など複雑に絡み合っている様子が分かって、また違う面白さが見えてくるはずです。



◀ヘラルト・ダフィット
『キリストの洗礼三連画』
(左)：一人息子の描かれ方から秘密が明かされる
(右)：『キリストの洗礼三連画』を閉じた場合の扉絵から、後に描き加えられたことがうかがえる
Permitted by Till-Holger Borchert

研究最前線

ユーザ中心デザインの研究

ユーザの立場から 使いやすい情報デザインを探求

地域の情報発信にユーザ目線の発想を生かす

◎総合情報学部
堀 雅洋 教授

スマホのアプリを利用しようとして、操作にストレスを感じて、途中であきらめてしまったことはないだろうか？ どんなに優れた機能も、実際に使われなければ役に立たない。堀雅洋教授はウェブコンテンツやソフトウェア、情報端末などの使いやすさ・わかりやすさを実現する技術や方法論について、人間の情報処理特性を考慮しながら研究してきた。ユーザ目線の発想を地域の情報発信に生かし、地域連携活動にも積極的に取り組んでいる。

ユーザ目線で価値を伝える情報デザイン探究

堀先生の研究室では、堺市や高槻市など、地域と連携した取り組みが活発ですね。

堺市との連携は、市の魅力をわかりやすく発信する「堺市シティプロモーション情報サイト」の制作に協力したことをきっかけに2012年ごろから始まりました。昨年公開された、堺市内の周遊コースや見どころを検索する地図アプリ「堺ガイドマップ」や堺市立町家歴史館 山口家住宅の魅力を紹介する特設サイト「堺町家物語」の制作も研究室の学生が中心となって、現地調査から、イラスト作成、ナレーション収録、映像編集まで行いました。

高槻市との取り組みは、情報通信技術を活用して高槻市の安心・安全について考える研究会を2010年から2年間にわたって開催したことから始まりました。その活動の一環として、災害時の危険箇所や避難所の情報をグーグルマップ上に表示させるハザードマップアプリを開発しました。それ以来、高槻市の防災訓練には総合情報学部の他の研究室とともに何度も参加しています。昨年は、タブレット端末を用いたクイズアプリと複数人で楽しむ防災カルタを体験してもらいブースを出展し、子どもからお年寄りまで幅広い年代の方々に避難時の心得について興味をもって学んでもらえるようにしました。

最近、大阪市の公式ウェブサイトの使いやすさの評価にも協力しています。サイト閲覧中のユーザの操作や発言を分析・検討



(左) 堺市シティプロモーション情報サイト
<http://www.city.sakai.lg.jp/kanko/sakai/cp/>
(右) 堺町家物語(堺市立町家歴史館 山口家住宅)
<http://www.hz.kutc.kansai-u.ac.jp/city.sakai/machiya/>



避難訓練会場で防災カルタに取り組み子どもたち

した結果として、情報探索の初期段階で過剰な選択肢が提示されないようにするデザイン方針を提案しました。

どの活動でも、「わかりやすさ」「使いやすさ」「快適さ」を大切にしているのです。

豊富なコンテンツを備えたウェブサイトなのに必要な情報になかなかと着けない、最新機能を備えたスマートフォンなのに使い方がわからないといったことはありませんか？ 一見複雑な機能でも、スムーズに操作できれば快適に利用することができます。私の研究室では、コンテンツや機能としてユーザに提供される情報を体系化し、わかりやすくデザインするとともに、その使いやすさを評価する研究に取り組んでいます。

キーワードとなる「ユーザ中心デザイン」とは、作り手ではなくユーザ目線に立ち、使いにくさやわかりにくさを解消しながら、より快適で理解しやすいものをデザインすることです。工夫のポイントは、見た目を整えることよりも、ユーザに情報の内容を的確に伝えることによって、その価値を理解してもらうことだと言えます。

学校教育現場で利用される
多言語情報検索サイトを実用化

先生が開発にかかわり、現在は文部科学省によって運営されている帰国・外国人児童生徒教育のための情報検索サイト「かすたねっと」においても、ユーザの立場からの使いやすさを意識されたのですか？

外国にルーツをもつ子どもたちを受け入れている小中学校では、それぞれの国の言葉で書かれた学校行事や健康診断などのお知らせ文書、日本語指導のための教材が必要とされています。このような多言語文書や教材は各地で作成され、教育委員会や国際交流協会のウェブサイトでも公開されていますが、普通の検索エンジンでは簡単に探し出すことができません。「かすたねっと」では、これらの文書・教材のもつさまざまな特徴を多面的にとらえた分類体系を構築し、検索の手がかりとなるキーワード候補をその都度ユーザに示す機能を実現することによって、多言語文書・教材を全国のサイトから横断的に探し出せるようにしました。

2011年の公開以来、利用者は年々増加し、全国から毎年約10



かすたねっと
<http://www.castanet.jp/>

万件のアクセスがあります。検索機能の開発では、実際に多言語の文書・教材を利用している教育関係者の方々約100人に公開前の検索ツールを利用してもらい、使いやすさについて評価実験と改良を繰り返したことが、利用率の高さにつながっていると思います。

このような発想が役立つ分野は、他にもありそうですね。

人間は正しい行動を知識として理解していても、その通り行動できないことがよくあります。例えば、思わぬ事故につながりかねないことは簡単に理解できるはずですが、人混みの中で歩きスマホをしている人をよく見かけます。このような知識と行動の不一致は、情報モラルだけでなく、災害時の避難行動や自然環境への配慮など、さまざまな場面で起こります。そこで、知識と行動意図の食い違いをデータで示せるようにする評価手法を提案し、適切な行動意図の形成を促すことができる学習支援システムについての研究も進めています。

ユーザ中心デザインでイノベーションを

地域連携の取り組みは、さらに発展させていくのですか？自治体からの相談はよくいただきますし、これまでの経験を生

かして少しでもお手伝いできればと思っています。堺市との取り組みでは、昨年に続き、3月5日～6日に堺市と関西大学の連携事業として、国の重要文化財に指定されている江戸時代の町家(山口家住宅)でAMD展(アート×メディア×デザイン展)を開催します。今年は「情景にふれあうメディア空間」をテーマに、総合情報学部の5つの研究室と特別協力アーティストによる作品が展示されます。

今年のAMD展は堺の情景がテーマなのですか？

堺市ほか関連自治体では、百舌鳥・古市古墳群の世界文化遺産登録に向けた準備が進められています。千年の時を超えて今に残る壮大な文化遺産の一端を、映像表現によって身近に感じてもらえれば、世界遺産登録に向けて一層機運が高まると思います。そこで昨年12月、全方位カメラを搭載した無人航空機(ドローン)で、大仙公園上空から周辺の古墳や市内の眺望を撮影しました。AMD展ではこの空撮映像を編集した作品や、古墳周辺を散策する際にスマホでも利用できるマップアプリなどが展示・公開されます。歴史的建造物に融和する情報メディア空間で、堺の情景を体感していただければと思います。

AMD展のポスター



仁徳天皇陵空撮映像
「体感空撮映像 ～空から見る仁徳天皇陵～」



最後に今後の抱負をお願いします。

情報技術によって解決される実社会の多くの課題には、人間が利用者、消費者、制作者、生産者などさまざまな立場でかかわってきます。同じ情報であっても、前提とする状況をどのように組み合わせるかによって、その意味合いはさまざまに変化しますが、情報技術と人のかかわるところには私は面白さを感じます。地域や場所とのつながりを見据えながら情報を多面的にとらえ、それらをユーザ視点で相互に関連付けて新たな価値を創出する情報デザインに取り組むことで、社会にイノベーションを起こすことを目指していきたいと考えています。



オーストリアのリンツで開催された芸術・先端技術・文化の祭典「アルス・エレクトロニカ」における展示作品のプレゼン

グランプリファイナル、全日本フィギュアスケート選手権大会

宮原知子さん、本田真凜さんが大活躍



宮原知子さん

12月10～13日、スペイン・バルセロナで行われたグランプリファイナルで、アイススケート部の宮原知子さん(高等部3年生)が自己ベストを更新し、銀メダルを手にした。続く12月24～27日、北海道札幌市で行われた第84回全日本フィギュアスケート選手権大会では、見事、金メダルを獲得。SP1位に続くフリーでは、初恋をテーマとする『ため息』を情感たっぷりに演じ、大会2連覇を達成した。この結果、宮原さんは今春、アメリカ・ボストンで開催される世界選手権の出場が確定した。豊富な練習量による抜群の安定感で、女子フィギュア界の新エースとして期待が寄せられている。

また、12月10～13日、バルセロナで行われたジュニアグランプリファイナルでは、アイススケート部の本田真凜さん(中等部2年生)が3位に入賞。世界の初舞台で、14歳とは思えない豊かな表現力で観客を魅了した。



本田真凜さん

Junior Grand Prix of Figure Skating Final

Grand Prix of Figure Skating Final Japan Figure Skating Championships

内閣総理大臣杯 第43回全日本空手道選手権大会

清水希容さんが金メダルを獲得!

12月13日、日本武道館で開催された内閣総理大臣杯・第43回全日本空手道選手権大会の女子形個人の部で、体育会空手道部の清水希容さん(文4)が見事、優勝を果たした。清水さんが演じた形は、糸東流の最高峰とも言われるチャタンヤラ・クーシャンク。難易度の高い勝負形で挑み、大会3連覇を達成した。

清水さんは、第22回世界空手道選手権大会や第70回国民体育大会空手道競技、空手1ープレミアリーグ沖縄2015で優勝するなど、数々の大会でメダルを獲得。また、2020年東京五輪の追加種目として空手道が提案された際には、大会組織委員会のヒアリングで「形」の演武を披露した経験も持つ。今大会終了後には、「オリンピックに向けて責任を果たせてよかった」と笑顔でコメントを寄せた。

全日本空手道選手権大会3連覇を達成した清水希容さん▶



◎人間健康研究科 博士課程後期課程開設記念 スポーツフォーラム2016を開催

スポーツとイノベーション～ラグビー日本代表にわれわれは何を学ぶのか?～



「スポーツフォーラム2016」で行われた講演。(左)平尾誠二氏(右)荒木香織氏



●パネルディスカッションの様子

関西大学は1月11日、千里山キャンパスソシオ AV大ホールにおいて、スポーツフォーラム2016を開催した。

シンポジウムでは、「スポーツとイノベーション～ラグビー日本代表にわれわれは何を学ぶのか?～」と題し、神戸製鋼コベルコスティーラーズ総監督兼GMであり、元男子ラグビー日本代表監督、関西大学人間健康学部客員教授の平尾誠二氏や、男子ラグビー日本代表メンタルコーチであり、兵庫県立大学准教授の荒木

香織氏がパネリストとして講演。ラグビーワールドカップ日本代表を世界で戦える魅力的なチームにするために行った30年にわたる取り組みを紹介。日本代表チームを支えた立場から、スポーツを支える人々に役立つヒントを伝授した。

会場では定員570席がほぼ満席となる来場者があり、日本のスポーツ指導にイノベーションを起こすきっかけとなる貴重な内容に、熱心に耳を傾けていた。

「第1回学生住宅デザインコンテスト」「第1回学生デザインコンペ」

江種航さん、大田美奈子さん、阪口友晃さんが最優秀賞を受賞



「第1回学生住宅デザインコンテスト」最優秀賞受賞の江種航さん(写真提供:毎日新聞社)

毎日新聞社主催の第1回学生住宅デザインコンテストで、江種航さん(環都4)が最優秀賞を受賞した。建築界の未来を担う人材の育成・支援を目的とするこのコンテストは、今回が第1回。「家をとことん楽しむ」をテーマに、江種さんは「大きなテーブルと軒下の家」を考案。生活に地域が入り込んでくる街のリビングのような家をコンセプトに定め、約200作品の中から選出された。受賞にあたり、江種さんは「家は周辺の環境の中に建てられるものなので、家の中だけが楽しいのではなく、地域のリビングになるように設計した。今後も社会に対して自分が良いと思えるものを提案していきたい」と喜びのコメントを寄せた。

また、三協アルミ主催の「未来のとびらコンテスト(大学生版)」第1回学生デザインコンペでは、大田美奈子さん(理工学研究科M1)、阪口友晃さん(環都3)が東京理科大学大学院の中塚大貴さんとの合作で、最優秀賞を受賞した。個人住宅部門のテーマは「ずっといたくなる家」。3人は集合住宅における建物構成と室単位の設えをコンセプトに「外気を設える家」を考案し、152作品の中から選出された。外気が在る事、風が吹き、日に照らされ、季節や天候で湿度が変わる。そんな些細な事柄を迎えるだけで生活は豊かになる、という考えから生まれた作品だ。



▲未来のとびらコンテスト「第1回学生デザインコンペ」個人住宅部門最優秀賞を受賞した阪口友晃さん(左)と大田美奈子さん(右) 最優秀賞受賞作品「外気を設える家」(写真提供:三協立山株式会社三協アルミ社)



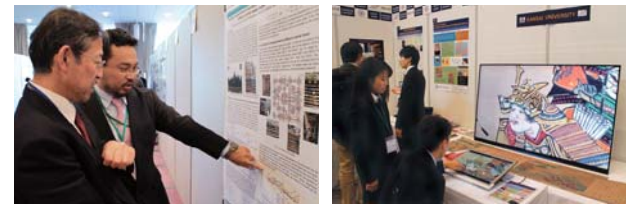
日本初開催！「第5回世界工学会議(WECC2015)」に出展

科学技術の祭典で、関西大学の「知」を世界へ発信

—先端科学技術がもたらす豊かで安全安心な暮らしをめざして—



▲「第5回世界工学会議」に出展した関西大学の展示ブース



(左)ポスターセッション (右) 平家物語絵巻の「超高精細デジタル化」

関西大学は、11月30日から12月2日の3日間、国立京都国際会館で開催された「第5回世界工学会議(WECC2015)」において、ブース展示およびポスターセッションを実施した。

世界工学会議とは、工学のあらゆる分野を横断し、技術の進化と社会貢献について議論する国際会議であり、世界工学団体連盟(WFEO)がおよそ4年に一度開催している。日本初の開催となった今回は、統一テーマ「工学:イノベーションと社会」のもと、約80カ国・地域から先端研究をリードする各分野の著名な研究者・技術者・政府関係者ら約2000人が集結した。

本学からは、理工系学部をはじめとする5学部・10人の教員が先端情報技術・防災・社会学といった取り組みについて参加。展示ブースにてシーズ発表、ポスターセッションにて研究成果発表を行い、環境問題、健康と安全安心な暮らし、エネルギー問題など、世界が直面する重要課題の解決に、先端科学技術がいかに応え得るか多面的な意見交換を行ったほか、文化遺産の保存と継承に挑む文理融合の取り組みなど、総合大学ならではの最先端の研究成果を披露した。

◎イノベーション対話プログラム「AjiCon2015」開催

AjiCon **こんなアイデア** どうですか?
～文系学生と理工系技術のコラボが生み出す新アイデア～



関西大学では、12月24日、グランフロント大阪にて、イノベーション対話プログラム「AjiCon2015～文系学生と理工系技術のコラボが生み出す新アイデア～」を開催した。

このプログラムは、本学理工系学部発の技術シーズを基に、商学部の学生チームが食品関連の新商品開発を目指し、企業関係者や研究者・消費者との対話を通して、事業化に向けたアイデアを創出するというもの。

今回のテーマは、技術シーズ「過冷却促進物質」。これは化学生命工学部・河原秀久教授が開発した物質で、0℃以下で氷核の形成



▲技術シーズについて説明する河原秀久教授

を抑制し、コーヒー粕や餡粕から抽出できる。食品にこの物質をエキスとして微量添加することで、商品を未凍結状態で保存することを可能にし、食品の品質保持や、冷凍できない果実や野菜の長期保存、海外輸出などが実現できるほか、組織や臓器保存など、食品以外への応用も期待されている。

当日は、商学部の荒木孝治教授ゼミ、西岡健一准教授ゼミの学生8チームが肉や野菜、豆腐、スイーツ、麺類などの身近な食品を用いて、外食産業や食品物流など、多岐にわたるビジネスプランを発表。会場には企業関係者や一般の方を含め116人が来場し、活発な議論を展開した。結果発表では、投票により、品質を落とさずに保存できる居酒屋メニューの展開「居酒屋革命～10分でわかる新しい飲食業のカタチ～」を提案したチームがチャンピオンに選ばれた。

今後はURA(研究支援専門人)が中心となり、研究推進部、社会連携部とともに、産学連携プロジェクトとして事業化を推進していく予定である。



▲学生チームによるビジネスプラン発表

◎「キャンパスママまつりin関西大学」を開催

大学とママ&キッズがつながるキャンパスイベント

12月13日、千里山キャンパスにおいて、NPO法人関西大学カイザーズクラブおよびNPO法人チルドリン主催による「キャンパスママまつりin関西大学」が開催された。

「ママまつり」は、ママの「好き」「得意」「経験」を集約し、全国展開しているイベント。今回は「ママまつり」史上初の大学開催としてカイザーズクラブと協同し、大学が保有する知財・人財・資材を地域に開放した。

当日、チルドリンからは親子で楽しめるワークショップなど40のブース出展に加え、華やかなステージパフォーマンスが披露され、会場は始終にぎわいを見せた。一方、カイザーズクラブではサッカーや野球、チアダンスなど、体育会の学生たちを主な指導者としたスポーツ体験が実施され、バフフルに活動する子どもたちの熱気に包まれた。また、本学高大連携センター提供による「回転」をテーマにした「サイエンスショー」も行われ、子どもたちは円飛行機の作成や実技などを通して科学の不思議を体感。総勢4600人を超える来場者の笑顔が溢れる大盛況の一日となった。



「そうだ！選挙に行こう！18歳選挙権フォーラム～明るい選挙推進講座～」開催

若者よ、立ち上がれ！“その一票で未来をつくる”



▲(左)約550人の学生が参加したフォーラム(右)パネルディスカッション
12月19日、千里山キャンパスにおいて「そうだ！選挙に行こう！18歳選挙権フォーラム～明るい選挙推進講座～」が大阪府選挙管理委員会との共催で開催された。

このフォーラムは、昨年6月の改正公職選挙法の成立を受け、今年夏の参議院議員通常選挙から選挙権年齢が満18歳以上に引き下げられる見込みであること、および若者の政治離れが指摘される現状を背景に、大学生の選挙への理解を促すことを目的とするもの。

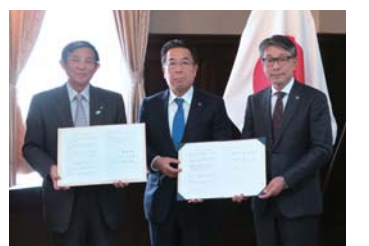
当日は約550人もが参加。法学部の浦東久男教授が「新しい税制、選ぶのは君たちだ！」をテーマに、政策選択の機会として選挙の役割について講演したほか、学生を交えたパネルディスカッションも行われ、若い世代の投票率低下の問題や選挙への意識、教育現場の取り組みなどについて、熱い議論が展開された。

GO! VOTE!

人材育成、研究・実践、森林保全活動を通じ、地域活性化に貢献

和歌山県及び田辺市と連携協定を締結

1月13日、関西大学は和歌山県と田辺市との間で、地域活性化に関する連携協定を締結することに合意し、和歌山県庁にて調印式を行った。今回の協定は、和歌山県が進める「大学のふるさと」制度に本学が賛同

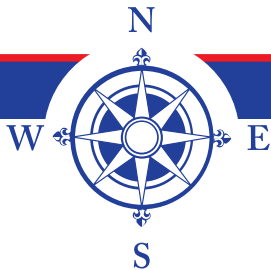


協定調印式での楠見晴重学長(中央)と仁坂吉伸和歌山県知事(右)、真砂充敏 田辺市長(左)

は、都市部の大学と過疎化の進む市町村が協力して地域の課題に取り組み、活性化につなげるというもの。教職員や学生が田辺市の活性化や少子高齢化などの問題に取り組んでいく。

また、関西大学は、田辺市本宮町の森林3.58ヘクタールを借り受け、森を守る「企業の森」制度にも参画。授業の一環として、学生などが森林保全活動にかかわっていく。また、今後は同市へのインターンやボランティアを行う予定のほか、農産品の六次産業化等の連携も推進される。

調印式当日、楠見晴重学長は「関西大学には3万人の学生がいる。さまざまな取り組みにより、地域の課題を解決し、地域に貢献したい」と挨拶。和歌山県知事、田辺市長も関大生のパワーを用いた街づくりに期待を込めた。



体育会ラグビー部が 47年ぶりの全国大学選手権大会出場で初勝利



(写真提供：関大スポーツ編集局)

2015年12月27日、滋賀県・皇子山総合運動公園陸上競技場で開催された第52回全国大学ラグビーフットボール選手権大会において、体育会ラグビー部が29対24で法政大学に競り勝ち、同大会初勝利を挙げた。47年ぶり5度目の出場で念願の白星を獲得し、主将の倉屋望さん(人4)達は「関大らしい粘り強い守備ができた。最高に嬉しい」と喜びを爆発させた。

体育会陸上競技部女子駅伝チームが 全日本大学女子駅伝対校選手権大会で8位入賞

2015年10月25日、体育会陸上競技部女子駅伝チームは宮城県仙台市で行われた第33回全日本大学女子駅伝対校選手権大会(杜の都女子駅伝)に、8年連続8回目の出場を果たし、8位に入賞した。これにより来年度の同大会におけるシード校枠を獲得。また、12月30日の2015富士山女子駅伝(2015全日本大学女子選抜駅伝競走)では、14位の成績を収めた。



(写真提供：体育会陸上競技部)

全日本学生選抜ソフトテニスインドア選手権大会で 佐々木美和さん・岡田菜帆さんペアが準優勝

2015年11月26日、東京体育館で開催された第49回全日本学生選抜ソフトテニスインドア選手権大会において、体育会ソフトテニス部の佐々木美和さん(社3)・岡田菜帆さん(社2)ペアが準優勝を飾った。2人は7月に行われた平成27年度西日本学生ソフトテニス選手権大会の女子ダブルスで優勝しており、今後の更なる活躍が期待される。



佐々木美和さん(左)と岡田菜帆さん▶
(写真提供：体育会ソフトテニス部)

関西大学中等部の渡邊太陽さんが 高円宮杯全日本中学校英語弁論大会で2位入賞



2015年11月27日、東京都・よみうり大手町ホールで行われた高円宮杯第67回全日本中学校英語弁論大会において、関西大学中等部の渡邊太陽さん(3年生)が2位に入賞した。演題は「The Power of Names vs. Privacy(名前の力とプライバシー)」。自らの体験を踏まえて固有の名前の重要性を訴え、「大きな声で落ち着いてできた」と受賞の喜びを語った。

社会安全学部が第6回東京シンポジウムを開催



◀(左)河田恵昭教授の基調講演
(右)学生によるポスターセッション

2015年12月11日、関西大学東京センターにて、社会安全学部による第6回東京シンポジウムが開催された。今回のテーマは「企業・組織の“強靱化”をどう進めるか～減災社会の未来構想～」。

同学部・河田恵昭教授の基調講演「大都市圏の死角はどこか? 企業が今なすべきことは?」に続き、専門家4人が事例講演を実施。学生によるポスターセッションも行われ、代表学生16人が日ごろの研究成果を披露した。